

大学生の留年の研究(II)

筑波大学心理学系

松原達哉

問 題

留年する学生は、ここ数年増加の傾向があり、多い大学では2~3割もいて問題になっている。この原因には、社会的要因、高校の進学指導の問題、大学の教育条件、心理的要因、健康的要因、家庭経済的要因、進路問題など多様である。

最近、留年については、学生相談、心理学、厚生補導などの面からの研究(組中, 1971; 組中・藤井, 1976; 土川, 丸井, 1978; 土川, 1978; 黒田, 1978; 松原, 1979)が多くなされている。しかし、留年の問題に対しては、価値観が多様化し、社会的変動や大学制度なども改革され立場により肯定意見あり、否定意見あり一律に決定しかねる。大学においても文部省や理事会や管理運営に当る大学教職員の立場、教育・厚生補導の立場、納税者の立場によっても違う。更に、学生の立場、学生の父母の立場などによっても考え方は異なる。また、留年といっても大学院受験・国家公務員上級職試験・司法試験・外交官試験などの再試験のために積極的に留年したものと勉強への意欲喪失、神経症、student apathy など不本意な留年者とによって考え方も異なってくる。

本研究では、現在1~4年に在学中(留年生は除く)の学生を対象に、次のような目的で調査をする。

- (1) 大学に在籍する学生が留年に対して、どのような態度や意見をもっているかを追究すること。
- (2) 大学に在籍する学生の大学に入学した動機、現在の大学への満足度、大学生活への不満・悩みを調べ、留年の遠因を研究すること。

方 法

被験者 被験者は、大学に在学している1~4年生で、留年生は除外した。対象は、筑波大学生と東京都文京区内にある男子4年生大学の学生が在籍している学生寮(和敬塾)の学生である。大学数は40校であり、合計368名である。

なお、学生数は早稲田大学90名、筑波大学87名、東京大学32名、慶応大学25名、日本大学15名、中央大学14名、東京理科大学11名、法政大学10名、明治大学、上智大学各7名、立教大学、成城大学、成蹊大学、東京農業大学、東京工業大学各5名、東京経済大学4名、明治学院大学、東京外国語大学各3名、駒沢大学、東洋大学、専

修大学、学習院大学、日本獣医畜産大学各2名、帝京大学、神奈川大学、二松学舎大学、独協大学、国際商科大学、日本体育大学、東海大学、亜細亜大学、武蔵大学、大東文化大学、青山学院大学、日本歯科大学、東京歯科大学、横浜国立大学、東京農工大学、横浜市立大学、東京都立大学各1名、合計368名である。

大学別の学年別人数は、1年132名(35.9%)、2年110名(29.9%)、3年71名(19.3%)、4年55名(14.9%)である。なお、現役は219名(59.5%)、浪人149名(1浪以上、40.5%)である。

調査内容 (1)留年に対する態度 (2)留年への意見 (3)現在の大学への満足度 (4)大学入学の動機 (5)大学生生活への不満と悩みの3分野について、5~23項目の質問項目を作成し、質問紙法によって調査した。記入は無記名である。

調査方法 筑波大学生の場合は、学生名簿よりランダムに20名に1名の割合で抽出し、その学生を対象に、調査用紙を直接または郵便で間接に送付し、郵便にて返答を求めた。他大学の学生寮の学生は、早大、東大、慶大などの学生が多いが、在寮生全員に、寮長→学生委員会を通じて用紙を配布し、回収は各寮(3寮有)の玄関に設置した回収箱に入れるようにした。

調査期間 昭和54年10月

分析方法 人数の多い筑波大学、東京大学、早稲田大学、慶応大学は大学別に、その他はまとめて分析した。最初に各分野の各項目毎の百分率を算出した。さらに、必要な分野については、現役入学と浪人入学生を比較した。さらに、留年に対する態度については、因子分析を行った。統計処理は筑波大学学術情報処理センターのTOSBAC 5600を用いて行った。

結 果

1. 留年に対する態度

(1) 全体および大学別の分析

在学生全体の留年に対する態度は、Table 1 のようである。第1位が「留学のためなら留年もやむをえない」が78.5%であり、第2位は「家族の病気のためならしかたがない」が77.7%、第3位が「大学院受験のためなら留年してもよい」が67.1%、第4位が「就職できなかったら留年するのやむをえない」が61.4%、第5位が「教員等資格取得のための留年ならよい」が54.1%であ

Table 1 全体および大学別の留年に対する態度 (%)

項 目	大 学					
	全 体	筑波大	東京大	早稲田大	慶応大	その他の大 学
(1) 留学のためなら留年もやむをえない。	78.5	81.6	29.9	75.6	84.0	76.9
(2) 家族の病気のためならしかたがない。	77.7	83.9	33.3	83.3	36.0	74.6
(3) 大学院受験のためなら留年してもよい。	67.1	75.9	29.9	66.7	60.0	59.7
(4) 就職できなかったら留年するのやむをえない。	61.4	67.8	84.4	64.4	52.0	51.5
(5) 教員等資格取得のための留年ならよい。	54.1	60.9	24.1	55.6	48.0	47.0
(6) 卒論、修論研究のための留年ならやむをえない。	49.2	63.2	23.0	47.8	36.0	40.3
(7) 自分の趣味のためなら留年するのよい。	24.2	27.6	11.5	18.9	44.0	20.1
(8) クラブ、サークル活動のためなら留年するのよい。	15.8	17.2	11.5	14.4	16.0	11.9
(9) 自治会・学生委員会、代表者会議、学園祭(寮祭)などの実行委員会のためなら留年するのよい。	13.3	14.9	9.2	13.3	4.0	11.2
(10) アルバイトのための留年ならよい。	6.8	12.6	6.9	5.6	0	2.2

る。いずれも半数以上の学生が肯定している内容である。

これに対して、アルバイト、自治会・学生委員会・代表者会議・学園祭(寮祭)などの実行委員、クラブ・サークル活動、自分の趣味などのために留年することを肯定するものは半数以下である。

大学別の分析をすると Table 1 に示すようである。これをみると大学によって、留年に対する態度がかなり異なる。筑波大学生は、①家族の病気 ②留学 ③大学院受験 ④就職 ⑤卒論・修論研究のためなら留年するのやむをえないと考えているものが多い。全般的傾向として早稲田大学にやや類似している。しかし、大学全体および他大学と比較して、筑波大学生の場合、①全般的に留年を肯定するものが他大学と比較して多い ②卒論・修論研究のためと教員等資格取得のための留年肯定者が他大学と比較して多い ③自治会・学生委員会、代表者会議、学園祭のために留年肯定者が多い。④アルバイトのための留年肯定者も最高(12.6%)である。アルバイトがないためであるのか経済的問題のためか不明である。この点、慶応大学は0%である。⑤自分の趣味のための留年肯定者(27.6%)も慶応大学に次いで多く、1/4以上である。筑波大学は、新しい大学であって、校風も徐々に形成されようとしているが、留年肯定者がやや多い点、今後の問題であろう。

東京大学生は、①就職できないときの、留年肯定者が84.4%でずばぬけて多い。他の留学、家族の病気、大学院受験などの留年肯定者よりも3倍近く多い。東大生が希望の就職先についていかに真剣であるかがわかる。大学院受験に対しても関心が他大学よりも低いのか留年肯定者29.9%で最も低い。留学のための留年についても、官庁や企業入社後に留学を考えているためか、29.9%で他大学の約1/3であって低い。早稲田大学は、全体の学

生と類似している。特色としては、自分の趣味のための留年肯定者は東大生に次いで少ない。慶応大学生は、①留学のための留年肯定者が84.0%で多い。②自分の趣味のための留年肯定者も44.0%で他大学生と比較して多い。③アルバイトのための留年肯定者は0%であり、家族の病気のための留年肯定者も36.0%で他大学の半数以下である。Keiō Boy といわれ、経済的にも恵まれているためか、スクール・カラーが出ている。その他の大学生は、私立大学生が多いが、アルバイトのための留年肯定者が少ない(2.2%)。就職のためや卒論のための留年肯定者も比較的少ない。

(2) 現役と浪人学生の比較

現役で入学した219名の学生と浪人(1浪以上)で入学した学生149名を対象に、留年に対する態度を比較した。その結果は、Table 2 に示すようである。

全体の傾向として、両群に若干の差のある項目もあるが、検定の結果、現役・浪人群間に反応傾向には差がなかった。

(3) 留年に対する態度の因子分析

留年に対する態度についての10項目に関する因子分析を行い、留年に対する在学生の態度分析を行なった。

まず、これら10項目間の相関係数を算出した。これらの関係から、その構造を検討するために、相関行列にもとづいて、主成分分析を行ない、バリマックス回転を行なった。その結果、得られた構造が Table 3 である。

第Ⅱ成分までで、全分散の43.7%を説明することができる。第Ⅰ因子は、勉強・就職に関する因子であり、第Ⅱ因子はクラブ・趣味に関する因子である。因子負荷量からみてこの2因子で留年に対する態度がほとんど説明できる。なお、これらの留年に対する態度の構造は、留年に対する原因の構造とも考えられる。

Table 2 現役と浪人学生の留年に対する態度の比較

項 目	現 役		浪 人	
	N	%	N	%
(1) 留学のためなら留年もやむをえない。	168	76.7	120	82.8
(2) 家族の病気のためならしかたがない。	173	79.0	113	77.9
(3) 大学院受験のためなら留年してもよい。	147	67.1	95	65.5
(4) 就職できなかつたら留年するのもやむをえない。	125	57.1	86	59.3
(5) 教員等資格取得のための留年ならよい。	121	55.3	74	51.0
(6) 卒論、修論研究のための留年ならやむをえない。	109	49.8	68	46.9
(7) 自分の趣味のためなら留年するのもよい。	53	24.2	37	25.5
(8) クラブ、サークル活動のためなら留年するのもよい。	39	17.8	19	13.1
(9) 自治会・学生委員会、代表者会議、学園祭実行委員会(寮祭)などのためなら留年するのもよい。	32	14.6	17	11.7
(10) アルバイトのためならよい。	17	7.8	8	5.5

Table 3 留年に対する態度の因子負荷行列

	I	II	h ²
(1) 留学のためなら留年もやむをえない。	0.606	-0.032	0.368
(2) 家族の病気のためならしかたがない。	0.602	-0.033	0.364
(3) 大学院受験のためなら留年してもよい。	0.704	0.132	0.514
(4) 就職できなかつたら留年するのもやむをえない。	0.588	0.129	0.362
(5) 教員等資格取得のための留年ならよい。	0.641	0.191	0.447
(6) 卒論、修論研究のための留年ならやむをえない。	0.610	0.268	0.443
(7) 自分の趣味のためなら留年するのもよい。	0.127	0.625	0.407
(8) クラブ、サークル活動のためなら留年するのもよい。	0.050	0.813	0.664
(9) 自治会、学生委員会、代表者会議、学園祭(寮祭)などの実行委員会のためなら留年するのもよい。	0.140	0.822	0.696
(10) アルバイトのためならよい。	0.076	0.657	0.437

累積寄与率 43.7%

2. 留年に対する意見

在学生在が、留年に対してどのような意見をもっているかを調べた。その結果は、Table 4 に示すようである。

多くの学生は(1)場合によってはしかたがない(39.4%)と考えている。特に、国立大学の東京大学(53.2%)、筑波大学(49.4%)に多い。私立大学になると早稲田大学(38.9%)も慶応大学(24.0%)も少ない。その他の大学生も32.4%で約1/3弱である。(2)親にもうしわけがないと考える学生が19.8%であって、特に、慶応大学、早稲田大学など私立大学生に多い。そして、(3)絶対にしたくないと考えるものは、全体で19.6%いる。特に、慶応大学(28.0%)、早稲田大学(23.3%)、その他の大学(23.9%)などに多い。それに対して、東京大学(9.4%)や筑波大学(10.3%)など、国立大学生は私立大学生の半数以下である。

なお、その他の意見のなかでは、(1)留年肯定的意見として、学部4年で短かすぎる(東大、早大)、経済的に許されれば、より深く研究するために留年賛成(筑大、早大)、条件さえ許せば学生時代を長く続けたい(慶大、筑大)、勉強もせずに卒業するくらいなら留年がよい(筑大)などがある。留年に否定的な意見としては、研究、勉強のための留年といえども甘えにすぎない(筑大、東大、慶大)、安易な気持ちでの留年は許せない(各大学とも)、留年すると就職に不利で社会の風当たりが強くなる(早大、慶大)などがある。その他の意見としては、教師の一方的なテストの結果で留年させられるのは困る。追試などの方法を考えて欲しい(筑大、慶大)、留年生を出さないよう学生の就職に大学はもっと力を入れて欲しい(筑大)などがある。

Table 4 留年への意見(%)

項目	計	筑波大	東京大	早稲田大	慶応大	その他の大 学
(1) 場合によってはしかたがない	39.4	49.4	53.2	38.9	24.0	32.4
(2) 親にもうしわけがない	19.8	17.2	12.5	21.2	28.0	20.9
(3) 絶対にしたくない	19.6	10.3	9.4	23.3	28.0	23.9
(4) 別に悪いとは思わない	9.8	11.5	12.5	8.9	4.0	9.7
(5) なんとも思わない	3.8	6.9	3.1	1.1	8.0	3.0
(6) 国費・授業料のむだづかいである	3.8	3.8	3.1	4.4	4.0	3.7
(7) はずかしいことである	3.0	5.3	3.1	2.2	1.4	2.3
(8) その他	2.9	1.5	0	3.3	4.0	4.5

Table 5 現在の大学・学部・学科・学群・学類(または主専攻)への満足度(%)

項目	計	筑波大	東京大	早稲田大	慶応大	その他の大 学
(1) 非常に満足	6.3	3.4	12.5	5.6	0.0	8.2
(2) だいたい満足	38.9	49.4	34.4	40.0	52.0	29.9
(3) ふつう	19.8	14.9	15.6	22.2	12.0	23.9
(4) やや不満	22.6	24.3	18.8	21.1	24.0	23.1
(5) 非常に不満	9.9	8.0	15.6	7.8	4.0	11.9
(6) その他	2.7	0	3.1	3.3	8.0	3.0

3. 留年に対する要因

(1) 現在の大学への満足度

現在の大学に対する満足度が、留年の要因になるのか、留年の予防(不満であるために早く卒業する)になるかは不明である。しかし、不満であれば、不適応を生じて、留年の要因になる可能性が高い。そこで大学に満足しているかどうかを調べた。

結果は、Table 5 のようである。全体では「非常に満足」しているものが6.3%、「だいたい満足」が38.9%であり満足組が45.2%である。「ふつう」組は19.8%である。「やや不満」は22.6%、「非常に不満」が9.9%であり不満組は、32.5%である。大学別にみてもこの傾向は類似している。若干違うのは、筑波大学は満足組が52.8%でやや多い。早稲田大学はふつう組が22.2%でやや多い。慶応大学は「非常に満足」は0.0%であるが「だいたい満足」が52.0%であって、満足組が52.0%が多い。その他の大学は、ふつう組が23.1%でやや多い傾向がみられる。

(2) 大学入学の動機

大学に入学する動機が意欲的な場合と、なんとなく入学した無目的、無自覚的な入学とでは、留年特に、不本意留年とは関係があると考えられる。そこで、学生がどのような動機で入学したかを調査した。

結果は、Table 6 のようである。全体としては、①学問するためが47.0%で最も多い。しかし、②大学に入ってから一生何をするか考えるが32.1%でこれも多い。③就職のため(学歴が必要であるため)が18.5%である。このほか、無目的・無自覚的な動機で入学しているもの、すなわち④なんとなく、親や先生がすすめたため、みんなが行くから、友人が欲しかったのでなども合計すると17.9%もいる。一般に、student apathyといわれる学生が10~20%いるといわれる。また、大学に進学するが、実際に卒業するのは、全国的にみると70~80%といわれているが、こうした学生のなかに多いのではないかと推測される。

なお、大学別に検討すると、「学問するため」に入学したものは、東京大学(68.8%)が最も多い。ついで、筑波大学(48.3%)、早稲田大学(44.4%)、慶応大学(28.0%)、その他の大学(16.8%)の順になっている。

「大学に入ってから一生何をするか考える」は、慶応大学(40.0%)、早稲田大学(35.6%)、筑波大学(32.2%)、東京大学(18.8%)、その他の大学(11.4%)の順になっている。「就職のため」(学歴が必要であるため)は、早稲田大学、筑波大学、慶応大学、その他の大学、東京大学の順になっている。なお、「なんとなく」入学したものは、慶応大学が16.0%もあり、他大学に比較

Table 6 大学入学の動機（%）

項目	大 学					
	全 体	筑波大	東京大	早稲田大	慶 応 大	その他の学 大
(1) 学問するため	47.0	48.3	68.8	44.4	28.0	16.8
(2) 大学に入ってから一生何をするか考える	32.1	32.2	18.8	35.6	40.0	11.4
(3) 就職のため（学歴が必要であるため）	18.5	20.6	6.3	22.2	16.0	6.5
(4) みんなが行くから	7.3	4.6	12.5	6.7	12.0	2.7
(5) なんとなく	4.9	2.3	3.1	3.3	16.0	2.2
(6) 友人が欲しかったので	3.8	2.3	3.1	3.3	8.0	1.6
(7) 親や先生にすすめられたため	1.9	1.1	3.1	0	4.0	1.1
(8) その他	5.7	4.6	0	5.6	4.6	3.0

Table 7 大学生活への不満・悩み（%）

項目	大 学					
	全 体	筑波大	東京大	早稲田大	慶 応 大	その他の学 大
(1) 講義の内容や方法に満足のもののが少なかった。	46.2	39.1	50.0	53.3	64.0	41.8
(2) 個人的に相談できる教官がいなかった。	26.9	23.0	50.0	37.8	40.0	14.2
(3) カリキュラムが希望と合わなかった。	25.8	32.3	25.0	31.1	20.0	19.4
(4) なんとなく多忙で、ものを考える余裕がなかった。	25.3	17.2	40.6	24.4	44.0	23.9
(5) 入学以前に、自分の大学についての知識が不足していた。	21.7	21.8	12.5	26.7	16.0	21.6
(6) 充実した生活もしないで、高学年になってしまった。	18.5	21.8	21.9	17.8	24.0	14.9
(7) 自分の在籍する大学は第一志望校ではなかった。	17.9	5.7	0	23.3	12.0	27.6
(8) 大学の組織・制度・講義の履習方法などについてのオリエンテーションが不十分であった。	17.1	17.2	18.8	24.4	12.0	12.7
(9) 図書館、教官、実験室などの諸施設が不備で勉強しにくかった。	15.2	25.3	3.2	14.4	4.0	14.2
(10) 自分の住居している地域は、文化的刺激が少なく味気ない学生生活である。	14.9	52.9	9.4	3.3	0	2.2
(11) 信頼できる教官に出会わなかった。	12.8	8.0	12.5	21.1	20.0	9.0
(12) 学生寮・宿舎・学生塾または下宿生活は不便であった。	12.2	13.8	18.8	11.1	20.0	9.0
(13) 専攻が自分の希望と一致していなかった。	12.0	10.3	12.5	16.7	12.0	9.7
(14) 先輩がいなくて相談できなくて困った。	11.1	27.6	6.3	2.2	0	9.7
(15) 対人関係で大変悩んだ。	10.3	11.5	12.5	7.8	20.0	9.0
(16) サークル（クラブ部）活動が不振で、満足のかゆく成果が得られなかった。	8.7	8.0	12.5	6.7	16.0	8.2
(17) 良い友人（異性も含む）が得られなかった。	8.4	3.4	15.6	6.7	24.0	8.2
(18) 先輩も少なく、東京への交通も不便で、就職その他の情報が手に入りにくかった。	6.5	24.1	3.2	0	0	1.5
(19) 自分の在籍する大学の世間での評価が厳しい	6.3	6.9	6.3	0	0	11.2
(20) 学生生活は自由が抑圧された生活だった。	4.6	8.0	0	2.2	8.0	4.5
(21) 転学部・学群・学類を希望したが不可能であった。	4.1	5.7	3.2	7.8	4.0	0.7
(22) 転学部・学群・学類したが、なじめない。	3.5	10.3	3.2	0	0	2.2
(23) その他	3.3	4.6	0	3.3	4.0	3.0

して多い。

(3) 大学生活への不満と悩み

大学に入学した学生が、現在の大学生活に対して、どのような不満や悩みをもっているかを調べた。不満や悩みの内容によっては留年の遠因になると考えられる。学生は、種々な悩みをもって生活しているが、大学により、その不満・悩みは異なる。

調査結果は、Table 7 のようである。全体として不満・悩みのベスト5はつきのようである。①講義の内容や方法に満足のいくものが少なかった。②個人的に相談できる教官がいなかった。③カリキュラムが希望に合わなかった。④なんとなく多忙で、ものを考える余裕がなかった。⑤入学以前に、自分の大学についての知識が不足していた。

大学別にみると、筑波大学は、「自分の住居している地域は、文化的刺激が少なく味気ない学生生活である」の内容が他大学生と違って多いのが目立つ。東京大学は「個人的に相談できる教官がいなかった」「講義内容や方法に満足のいくものが少なかった」などが半数いる。早稲田大学、慶応大学も類似した傾向がある。ただ、早稲田大学は「カリキュラムが希望と合わなかった」ものが1/3いる。また、「入学以前に、自分の大学についての知識が不足していた」が26.7%であり多い。さらに、「自分の在籍する大学は第一志望校でなかった」ものが23.3%いて、その他の大学の27.6%について多い。

考 察

本研究は、大学に在学する学生の留年に対する態度や意見及び留年の遠因に関する研究である。

この結果によって、在学生在が留年に対してどのような態度や意見をもっているのか、ほぼ実態が解明された。被験者として、筑波大学生は、全学からサンプリングしたので、全体の傾向は把握できる。しかし、他大学の場合は、調査方法が困難であるので、1つの学生寮に在寮する学生を対象にした。しかもその大学の在籍人数に比較して人数が少ないので、1つの大学の傾向とはいえない。しかし、本調査結果から考えて、類推できるような傾向はみられた。また、全体の結果から現在の学生像は把握できるのではないかと考える。

留年に関する意識調査は、留年生を対象にした土川・

丸井らの研究(1978)を除いて殆んどない。在学生对しての調査も皆無に等しい。この留年に対する是非論はともかく、全国的に年々増加する傾向があるので、これに対する対策は考えねばならないだろう。筑波大学の昭和53年度の留年生は715人中84人で11.7%であった。昭和54年度における留年生は、Table 8に示すように平均17.9%であって全国の大規模大学に比較すれば少ないが、しかし増加の傾向である。全国的にみると4年制大学で1年間に約53,000人が留年しており、5,000人規模大学の約11校に当たる。

人生において、最もエネルギーな青年期に、もし不本意な留年をして、心身を消耗するようでは歓迎できない。Lehman, H. C. (1953)の研究においても、人間が最高の業績を現わすのは30歳代であり、ついで、40歳代、20歳代であって、50歳代以後はずっと低下することを見出している。その意味で、20歳代から30歳代は、知能が成熟し、偉大な業績を創造する時代であり、1年1年が重要な時代であるともいえる。こうした発達心理学的な意味でも、留年問題は重要である。

本研究は、そうした意味で、在学生在がどのような態度や意見をもっているか知ることができたし、今後の留年問題を考える上に参考になるところもあろう。

なお、本研究は、学生相談の立場から留年問題に関心を持ち、相談や研究を手がけていたところ自治研究会でもこの問題に関心を持ち文献収集や討議をされていた。そこでそれらの方々と討議し、さらに奥平和彦常務理事および敬塾学生委員会の皆様の御協力によって本調査を行いそれを統計処理したものである。特に、三宅文夫・山田淳一・服部環諸氏には多大の御協力をえた。ここに深謝申し上げる。

要 約

目的；大学に在学生在が留年に対して、どのような態度や意見をもっているか、さらに留年に対する遠因を研究すること。

方法；大学生368名を対象に、質問紙法によって調査した。内容は、1. 留年に対する態度、2. 留年への意見、3. 現在の大学への満足度、4. 大学入学の動機、5. 大学生活への不満と悩みの5分野である。

結果；1. 留年に対する態度とは留学、家族の病気、大

Table 8 留年生人数および留年率 (筑波大学, 昭和54年3月卒業予定者)

学類学群	人 文	社 会	自 然	比 文	人 間	生 物	農 林	体 育	芸 術	合 計
留 年 生 人 数	31	22	47	22	28	3	18	29	11	211
54年卒業予定者	143	106	220	80	117	78	113	246	72	1,181
留 年 率 (%)	21.7	20.8	21.4	27.5	23.9	3.8	15.1	11.8	15.3	17.9

(外国人は除く)

学院受験，就職，教員等資格取得のためであれば肯定するものが半数以上いた。しかし，大学別によって，留年に対する態度がかなり異なる。現役と浪人とは考え方に差はない。因子分析の結果，勉強・就職に関する因子とクラブ・趣味に関する因子の2因子が見い出された。

2. 留年に対する意見としては，私立大学生は国立大学生に比較して批判的厳しい考え方をもっている。

3. 留年に対する遠因として，次の3項目について分析した。第1は，現在の大学への満足度であり，満足組は45.2%，ふつう組は19.8%，不満組は32.5%である。第2は，大学入学の動機であるが，なんとなく，親や先生がすすめたため，みんなが行くから，友人が欲しかったなど無目的・無自覚的な入学生が17.9%いた。第3は，大学生活への不満と悩みについてである。これでは①講義の内容や方法に満足のもの少なかった。②個人的に相談できる教官がいなかった。③カリキュラムが希望に合わなかった。④なんとなく多忙で，ものを考

える余裕がなかった。⑤入学以前に，自分の大学について知識が不足していたなどが多い。

引用文献

- 黒田正典 1978 大学生の留年—その原因と意味—現代のエスプリ 別冊 青年「不安と病理」 100—114.
松原達哉 1979 大学生の留年の研究（Ⅰ） 筑波大学心理学研究，1，26—34.
岨中 達 1971 教養課程留年と卒業遅延 京都大学学生懇話室紀要，1，42—53.
岨中 達・藤井 虔 1976 修学指導に関する諸問題 厚生補導，119，10—22.
土川隆史・丸井文男 1978 大学生の留年の実態とその要因の分析 名古屋大学学生相談
土川隆史 1978 留年の心理とその対応—カウンセリング活動を中心にして—厚生補導 22—33.
Lehman, H. C. 1953 Age and achievement. Princeton University Press

—1979. 10. 19. 受稿—

SUMMARY

The Problem of Repeaters in Universities (II)

Tatsuya Matsubara
The University of Tsukuba

Purpose ; One of the purposes of this research is to investigate what kind of attitudes or considerations students have for the repeaters in university, and another is to study the causes of repeaters in university.

Method ; Investigation of 368 students via the questionnaire method. The contents of the questionnaires were as follows, 1. attitude toward repeating. 2. consideration of repeaters by peers. 3. the degree of satisfaction at present. 4. derivation of entrance seasons. 5. discontents and mental trouble of student life.

Results ; 1. The attitudes of over half of the students polled are that inevitable events cause repeating ; i. e. Going to school abroad, sickness in the family, problems concerning entrance to graduate school, seeking employment and the acquisition of professional licenses. However attitudes for repeater problems are different from classified universities. In consideration, there are no differences between the students enrolled immediately after finishing high school and those who enter more than one year after finishing high school. The results of factor analysis showed two factors, one of them is the progression to graduate school and /or seeking employment and the other is club activities and hobbies.

2. Consideration of repeaters by the students

of private universities is more critical than by the students of national universities.

3. In reference to the course of repeaters investigated on the following three items ; the first is the degree of satisfaction at present.

satisfied group45.2%
no opinion group19.8%
dissatisfied group22.5%

4. Concerning the motivation for entrance to the university, the following results were obtained;

- (1) Without special reason.
- (2) Encouraged by parents and/or teachers.
- (3) Following the crowd.
- (4) Longing to have many more friends.

these groups of aimless or self-unconsciousness students show a ratio of 17.9%.

5. Results concerning the discontents and mental troubles of student life are shown in the following items in descending order of ratio.

- (1) Few students are satisfied with the content and method of their lectures.
- (2) No faculty members are available who can help with the students' problems.
- (3) The curricula were not desirable.
- (4) Students did not think about the problem.
- (5) Lack of information about the university before enrolling.